

新ルート発見で楽しい山歩き

京田辺市の南西部にある独立峰甘南備山（二二二m）に登りました。この山は京田辺市発行甘南備山登山マップによると「延暦一三年（七九四年）、桓武天皇による平安京造営に際して、京都の中軸線

清水 正の

一里一尺

～自然をたずねて～ ⑫

身近な里山の秋

～多様な地形に多様な植物～
ひつつきむしたちの世界

として朱雀
大路建設の
目印にされ
たという「
いわれのあ
る山です。

古くは神南備山とも呼ばれ、「神の隠れる場所」として信仰の対象でした。一休寺から薪神社に至り、真つ直ぐ進むとメインルートに続く登山道、別に途中で右に曲がり川沿いに行き、田んぼを抜けて山に入る登山道が有ります。いずれも途中からいくつも分岐するルートがありバリエーションに富みます。初めて来たときはメインルートをとって植栽が多く階段の多い、草木の観察にはいまいちの所でした。しかし、地図で見ていると多くのため池があり興味をそそられる場所もありましたので、そこへ



ミゾバ



サクラタデ

秋の始まり

行く道を探しましたが入口がわからずにいました。ひよんな事から友人にため池に到るルートを教えてもらい行つた所、草地在が広がりなかなか素敵な場所でした。

今回はそのルートを歩きました。山の麓に田んぼが広がります。稲はもう頭を垂れています。畦にはアカマンマ（イヌタデ）、ミゾバ、アキノウナギツカミ、ハナタデ、サクラタデなどのタデ科の草が広がっています。反対の山側には貝の実のような形の黄色の花をつけ

たノアズキ(ヒメクス)、ヤブマメ、アレチヌスビトハギなどのマメ科植物が彩ります。マメ科とタデ科。いよいよ秋の始まりです。先に進



ノアズキ(ヒメクス)



アキノウナギツカミ

むと小川沿いの道で、水が滲み出す湿地状になってきました。ここからはツリフネソウの群落が始まります。少し前は希少種もありましたが、すでに草刈

世界にツリフネソウのなかまは六〇〇種以上知られています。日本のツリフネソウは三種と少ないです。しかしこの三種の花はいずれもよく似た形で、長い花柄の下にぶら下がっています。正面から見ると二枚の花弁が前に大きく突き出し、上に被さるように一枚の花弁が出て、奥に行くほど狭まる筒状になっています。そして筒の先はくると巻き込み距になっています。この距に密をため昆虫を誘い込みます。筒の入り口はまるでオーダーメイドのように、花粉を運んでくるマルハナバチの類にぴったりのサイズになっています。マルハナバチたちは花の正面

りされてきました。

昆虫と植物の微妙な関係

ツリフネソウ

入り口から、突き出た下唇の花弁を離発着場のように降り立って密のたまった距へと進みます。その時、上の花弁から突き出た雄しべがマルハナバチの背中をこすり、花粉をつけるとともに雌しべに他花の花粉をつけていくというしくみになっています。マルハナバチは同じ種の花に行き来する率が高く受粉効率がよいといわれています。多くのツリフネソウを訪れたマルハナバチの背中毛はすり切れていると言います。研究もありなかなか面白いです。植物の側から見ると前に突き出し



ツリフネソウ

た花卉をよく見ると、すごく傷が付いたものがあります。これは沢山のマルハナバチが訪れた時に引つかれたもので、受粉が完了したことがわかります。しかし、いつも上手いくわけではありません。クマバチは身体が大きく、花に潜り込むことが出来ません。そこで彼らは距の外側に穴を開け蜜を採ります。またホシホウジャクという蛾は花の前でホバリングしながら長い口吻を花に差し込み蜜を吸います。いずれもツリフネソウにとっては無銭飲食の困ったお客と言うことになります。全てが上手く行く事はないのが世の常といった感じで、虫と花の関係もなかなか面白いですね。ツリフネソウ属の学名は *Impatiens* (もう我慢できない)、その名の通り成熟した果実に触れたり揺れた

りすると、突然のように中の種子が飛び出します。飛距離は数メートルにもなることがわかっています。動物による種子散布のように遠くには行かないですが、一年草のツリフネソウにとっては、親が育った近くの場所こそが確実に大きくなれる安全な場所であり、子孫繁栄が約束されるという戦略なのでしょう。

ひつつきむしアラカルト

小川を渡り山道に入ると、実をつけたウドが斜面の下に沢山見られ、道沿いには在来のもスビトハギやイノコヅチ、ササゲサ、チジミザサなどが花や実をつけたでいます。これらはどれもひつつき虫(くつつき虫)と呼ばれる類で、動物の身体について種子を移動させ、遠くに種子を散布するという

移動出来ない植物が分布域を広げるしくみです。私たち人間と動物ですから除外はされません。この時期の野山歩きには致し方がないことですが、ズボンの裾に付いたひつつきむしは厄介なものです。しかし植物にとっては人間に運ばれた種子の多くはバス待ち時間などにズボンから外されアスファルト道路に捨てられ、子孫の芽ばえる機会が少なく迷惑な運び屋です。山道に入る前の田畑周辺ではアレチヌスビトハギ(外来種)が多く、山に入るに従ってヌスビトハギ(在来種)に変わるのは、きつと人の出入りの違いなのでしょう。この二つとても似ているようですが、実の付く時期に見るとすぐに違いがわかります。アレチヌスビトハギは豆が三から六連なっています。ヌスビトハギは二連で



チジミザサ



ヌスビトハギの実



アレチヌスビトハギの実

茶色の班を持っています。名前の由来としては諸説有りますが、ヌスビトハギの豆果の形が盗人の足跡に似ているからと言うものがあります。とすれば在来はコソ泥で、豆果が六つもあるアレチヌスビトハギは盗人集団（ギヤング）ということでしょう。さすが北米からやって来ただけがあると、一人笑っている私です。しかしそんなことに悦に入っているのもいいですが、すっかり花を見てやってく

ださい、小さいながらも萩のような蝶型花冠をして愛らしいではありませんか。この植物はなかなかの知恵者で、豆果の表面は毛に覆われ、先が鉤状になっています。この鉤で衣服にひっついてなかなかとれないのです。でもこれに似たものが人工であります。皆さんが普段の生活でお世話になることが多いマジックテープです。ひつつきむしの構造を元に考案されたものといわれています。自然

界のものからヒントを得て沢山のものが作られています。そう思うと自然ですごくいいわざるを得ませんね。

秋も深まるとともに、ひつつきむしは町の中にも野山にも沢山見られるようになります。沢山の子どもたちを連れて河原に行ったりすると、採ってきたヌスビトハギ（他のものでもかまわない）を縦、横、斜めに並べて服の上に文字のように貼り付けると名札に早変わりします。子どもは面白くなって互いにひつつけ合って賑やかに遊び出します。「他にひつつくものはないかな」というといろいろなひつつきむしを探してくれます。センダングサ、コセンダングサ、アメリカセンダングサ。オオオナモミを発見すれば即席ダーツ（堅いフック型）。チカラシバがズボン

の裾に刺さります。前述した山道にもササグサやチジミザサが生えていてハイカーを悩ませます。ひとときわ厄介なのがチジミザサです。これは麦の実の先が長く尖っているのを想像してもらえばわかると思います。芒といってイネ科の植物によく見られる細く尖った刺のようなものが実についていてひつついてきます。おまけにその芒には粘液が付いていてネチャネチャとくつつくのです（刺と粘液型）。ダブルで来るから採るのが大変。センダングサの類は種の先が尖っていますが、抜けないように返しをつけています（逆さ刺型）。ヌスビトハギのなかまは柔らかいフック型です。ひつつき虫の観察にはルーペが必携です。皆さんも童心に帰って、秋の一日をひつつきむしで遊んでみては如何でしょ

うか。ひつつきむしオタクになるための便利な図鑑があります。

「ひつつきむし図鑑」監修 北川尚史／写真 伊藤ふくお／文 丸山健一郎（トンボ出版）

秋満喫

もう少し奥へと進んでみましょう。植林地に入りそこここにきのこが見つかります。キクバナイグチなどのイグチ類、クサイロハツチチタケなどベニタケ類、ヒナツチガキ、エリマキツチグリ、ノウタケ、カニノツメかと思われるきのこのなどの腹菌類、ナラタケモドキなど多種多様なきのこが見られます。中でも腹菌類は色形とも変化に富んで名前がわからずともファンタジーな世界を楽しませてくれます。間もなく頂上です。ここで山城や生駒の山なみなどを

見てから扇池へと向かいます。今までの景色とは一変して、池畔には草地在り、池畔のウメモドキ、イソノキ、ワレモコウ。斜面に広がる

アキノタムラソウ、ツリガネニンジン、ヒヨドリバナ、サワヒヨドリ、コガシロバナなど秋の草花が咲きほこります。今の日本では少なくなりました。風景です。



エリマキツチグリ



ツリガネニンジン